

月刊・神戸 1980/3

# 読書アヲカルテ

- 古書店讀歌余話 (1~2ページ)
  - 織田作之助と可能性の文学(四) (3~4ページ)
  - 佐高 信「経済小説の読み方」 (5~6ページ)
  - 郷土誌の源 (7~8ページ)
  - 海文堂・3月のフェアご案内 (9ページ)
- 
- 神戸文学学校・特別講座のおしらせ (11ページ)
  - 校正クイズ (12ページ)



海文堂書店発行

〒650 神戸市生田区元町通3-146

NO.  
4

## 古書店讃歌余話

島田 誠

不思議な糸に操られたかのように、私が古書店で二十年前に叔父の出版した本に巡り合い、その事情を昨年四月の「読書アラカルテ」に書いたところ、田中先生のお目にとまり、私を仲立ちとして、田中先生と叔父の間に交流が生れ、前号の「一冊の本」を田中先生が書いてくださったわけで、本の寿命が短かくても、読者の心の中にこのように生き続け、ある時、再び熱く蘇るという得難い体験をまのあたりにし、著者はもちろん、我々書籍業界に糧を求めるものの、冥利と同時に恐ろしさも痛感いたしました。二度あることは三度あると申しますか、今度は、「読書アラカルテ」の編集の中心である小林主任が、これまた珍しい記事を発見してくれたので御紹介しておきます。最近、小林君が絶版になっている本を版元に無理にたのみこんで送ってもらった本。加藤康司著「赤えんぴつ四十年」(昭和37年10月20日初版・有紀書房)に、なんと、「ふだん着の英国」の校正にまつわるエピソードが紹介されている。以下引用。

ノーベル賞には私ににがい思い出がある。同僚島田巽君の『ふだん着の英国』というロンドン特派中の随筆をまとめた単行本がある出版社から出た。その校了ゲラ(一通りの校正が済んで印刷所へ渡す最後の刷り)を念のためというので、頼まれて読んでいたときのこと、人間としてのチャーチルを論じた文章が大へんいいもので、深く私の印象に残っていた。仕事のつごうで途中まで読んでやめ、翌日その続きを読み進んでいると、バーナード・ショウのことが書いてあったが「1925年に授与されたノーベル賞状が壁に掲げられてあった。」とあったのを「これは島田君の書き誤りだ」と一途に思いこんで1925年を、1953年と直してしまった。というのは、前の日、チャーチルの項で、老首相が1953年にノーベル文学賞を授与されたことについて、ノーベル賞にも政治色がついたとか、チャーチルの著作は文学的価値がないとか、世評はいろいろあるが、スウェーデン学七院もなかなか味のあることをやるものだ— というようなところを読んでいたので、それが頭に残っており、ついその続きのような錯覚にとらわれていたらしい。1925年と1953年と数字が似ていたことが、私の錯覚の原因だったが、島田君に「島田さん、えらい書き違いをやりましたね」といって、一本やっつけたつもりが「君こそ少しどうかしているぞ」

と逆襲されて大いに閉口した。

「一冊の本」に田中先生が書いてくださった印刷のいきさつや、ここで加藤氏が書いておられる校正の裏話は、立派な本が出来る陰での目立たないながら、絶対にゆるがせに出来ない部分が窺えて心に残ります。

その格調の高い文章を掲載した本紙が、誤植だらけで恥しい限りです。紙面を借りてお詫び申し上げます。予算の関係上、社内製作のため、工程上、やむをえない点もあるのですが、初歩的なチェックも出来ていない現状は、充分反省しております。

版3号の「一冊の本」(1ページ)で一新紀元が、一新記元に、布装が布袋になっておりました。先生の名エッセイを活字が汚してしまったこと、悔みて余りあります。



## 織田作之助と可能性の文学 (II)

晩年に書かれた「土曜夫人」「夜光虫」「それでも私は行く」「夜の構図」等についても、彼は<嘘の可能性を試してみた>というけれど、登場人物たちが次々と‘ふと’というつなぎの言葉だけで新しい行為に移る安易さや、あまりにもつじつまの合いすぎる見えすいた偶然性等がこれらの作品をひどく通俗的なものにしてしまっているような気がする。結局、彼の小説は‘心境私小説’の型から出るものではなかったし、彼のいう<志賀直哉の亜流>と何ら変わらなかったのではないかと思う。

彼は、絶筆となった「可能性の文学」のあと、「虚無の強さ」という評論を書くつもりだったという。

次のは「虚無の強さ」ゆうやつ。これはだいたい、武者小路ジツクを敵くつもりや。武者小路ジツクあれはいかん。

と絶対安静の床にあってもいきまき<攻撃目標、新しき村>と放言していたという。彼はいつも‘自虐’というものにさいなまれていたから、武者小路実篤の楽天的な自我讃歌にたまらない反発を感じたのだらうと思う。けれど、彼自身、自己探究、自己への反逆、自己からの脱出は試みようとしただけだった。<自然主義を主流と考える時、その権威を破砕し、それへの反旗を翻したことでは無頼の要素を持ちえた>白樺派なのだから、既成文壇に反逆したという点では、彼と同じだし、武者小路実篤の「新しき村」にしても、方法は違うけれど、社会に反逆したという点で、彼と共通するのではないだろうか。彼は「私の文学」の中で、

私は今、私を孤独と放浪へ追いやった私の感受性を見極めて、これを表現しようと思っている。そしてまた、私をそうさせた外界というものに対決しようと思う。

(中略)しかし、右の仕事を終った時どうなるか。(中略)そのあとには何も残らないかも知れない。おそるべき虚無を私はふと予想する。しかし私は虚無よりも創造の可能性を信じている。

と言っている。彼は、<おそるべき虚無よりも創造の可能性>をひたすら信じて、とにかく書きつくしてしまいたかったのだらうと思う。<何も残らないかもしれない>と彼は言ったけれど、書きつくした時から、彼の本当の文学がはじまったのではないだろうかという気がする。<それだけが私の生きる希望をつないでいるのだ。目的といいかえてもよい>そんな‘文学’のため、そして書きつづけるために、彼は、全てを犠牲にし

て書いていたけれど、文学への希望をつなぐはずの、生活や健康の浪費が、文学への道  
さえも絶ってしまう結果になるとは、彼自身考えていただろうか。＜私という人間の感  
受性は、小説を書くためにのみ存在しているのだと、今はむしろ宿命的なものさえ感じ  
ている。＞と言い切った彼なのだから、斬り死など覚悟の上での犠牲だったのだろうと  
思う。ただ、その凄絶な斬り死が、彼が考えていた以上に早く、そしてあまりにも突然  
にやって来ただけのことなのだ。（了）

（小倉久仁子）

忘れていた 忘れていた  
やがて死ぬ身であることを  
飯をくらいお茶をのみ馬鹿話して  
けちくさい恋も照れてやり  
小説本をよみながら  
死ぬことを忘れていた  
やがて死ぬことを

織田作之助

## 佐高 信「経済小説の読み方」

植 村 達 男（八王寺市在住）

今年の1月19日に発行の「経済小説の読み方」（こう書房・980円）が中々人気が出  
て売れ行きが良いようである。

一見極物風<sup>きんもの</sup>タイトルであるが、この本は単に経済小説を羅列して、適当に紹介したよ  
うな安易なものではない。著者は大学入学と同時に読書ノートをつけ始め、今や13冊  
を数え、読後感を記入した本は2,400冊を数えるという。

この本にとりあげられた経済小説家（城山三郎・山崎豊子・清水一行・森村誠一等々）  
は約70名、経済小説は約200冊である。これらの人と小説を材料にして、著者が  
「経済小説」というものをタテ・ヨコ・ナナメに切っている。「経済小説はなぜ読まれ  
るか」、「テーマ・業種別（銀行業・自動車業……）読書案内」、「この企業、このモ  
デル」という風に章が組まれている。

巻末には取り上げた経済小説一覧が出ている。この中で私が読んだことがあるのは僅  
かに10冊であった。これを挙げると次のとおりで、神戸に関係深いものが3冊混って  
いる。（○印のもの）

- |       |                |
|-------|----------------|
| ○大岡昇平 | 「酸素」           |
| 獅子文六  | 「大番」           |
| 清水一行  | 「小説兜町」         |
| 城山三郎  | 「総会屋錦城」        |
| 同     | 「毎日が日曜日」       |
| ○同    | 「鼠」            |
| 同     | 「真昼のワンマン・オフィス」 |
| 山崎豊子  | 「暖簾」           |
| 同     | 「花のれん」         |
| ○同    | 「女の勲賞」         |

なお、この本を読んで感じたことが2つある。第1に著者は、「生きた経済」を知る  
ために優れた経済小説を読むのが一番いいという。そのこと自体私は何も否定しないけ  
れども、経済界に身を置いていない（置いたことのない）人々——主婦・学生・学者・  
ジャーナリストたち——が経済小説を読み、これをもってのみで「生きた経済」を想像

すると、現実とは相当の乖離が生じるということである。小説に描かれる「生きた経済」はいわば氷山の一角で、その背後には<sup>と</sup>極く平凡な、そして日常的な事象が存在し、全体が合わさったものが現実の「生きた経済」なのである。

第2に、清水一行についてである。私は昭和40年春に「小説兜町」が出た当時、この本を読んだ。確かに面白い本ではあった。しかし、その内容(構成・文章)が杜撰かつ粗雑であること甚しく、以来私はこの著者の本は絶対に読まないことにしている。佐高信は、私と同じような感想をもたなかったのだろうか。

最後に佐高信には「ビジネス・エリートの意識革命——企業人の面とペルソナ——」(昭和52年・東京布井出版)がある。特にサラリーマン諸氏の一読をおすすめする。

#### 一注記

植村達男氏は、「本のある風景」(勁草書房)の著者。昨年の読書アラカルト<sup>16</sup>10に紹介記事あり。

## 郷土誌の窓

冬の山道も、その行先に光が射してきた感じのする3月。さあ、あと一息で春です。樹も草も土も人も、風薫る季節を待っています。

80年代に入って、最初に発行されたのが落合重信先生の『神戸の歴史・研究編』です。正編と同様に、三宮の後藤書店から発行され、地味ながら、神戸を愛する人々に広く読まれています。僕自身にとっても待望の一冊。神戸地方の古代に条理制があったことを論証した「神戸地方の条理」は前々から読んでみたいと思っていた論文です。その他、昭和16年の「『萬葉集』の刊行事情と植田春海」から、最近のものでは、昭和53年9月の『歴史と神戸』に載った「神戸図書出版史・明治編」まで、落合先生の郷土誌研究の足跡が収録されています。定価は2,800円。当店にてお取扱ひしています。

書店での販売本ではありませんが、1月17日付の読売新聞に、味のある記事が掲載されておりましたので、是非紹介したいと思います。\* 思い出多い「学級通信」/卒業生へ縮刷版<sup>ろく</sup>というタイトルのこの記事、三木東高校の山本敏良先生が2年間、159回にわたって発行し続けた「<sup>しみ</sup>鯉」という名の学級通信を、自費で出版して卒業していく生徒たちに、実費の半額以下の500円で譲っているというもの。ガリ版刷をタイプ印刷に改め、図表や写真もそっくり入れて、1回分をB6版2ページに編集して320ページ、ボーナスなど55万円をつぎ込んで500部を作成したものです。生徒たちには「在学中の思い出のドキュメント」と好評です。学級通信を出す先生はありますが、こういう形での出版は初耳で、しみじみとその行為に感動を覚えます。

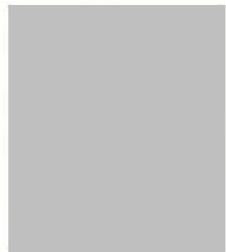
神戸と隣接する三田市では、県営青野ダムによって水没する<sup>あ</sup>青野川・黒川水系の民俗調査報告<sup>あ</sup>がまとまった、と2月7日付新聞紙上に報道されています。記事によりますと、報告書は◎歴史◎社会生活◎総観◎歴史「生業」「口頭伝承」など12章からなり、「年中行事」「方言」などには、三田地方独特の地方文化が色濃く保存されているということがつきとめられた、ということです。

同様の方言研究ということでは、関西大学の学生グループ「関西大学方言研究会」が、丹後方言を上・下2巻の研究誌にまとめたという記事(読売・2月17日付)が光っています。「郷言(さとごと)」というタイトルの同会研究誌に掲載されたもので、大きさは週刊誌大で、上巻264ページ、下巻281ページ。ガリ版印刷のため、上・下巻ではほぼ大阪市内の電話帳なみのボリューム。夏休みの方言調査をまとめたもので、調査の重点は、生活用語におき、あいさつの会話、日用品の購入場所などの買物行動圏や、

通婚圏まで聞いたユニークな内容です。

神戸市内にかえりますと、神戸市が昨年6月の市制90周年を機に編集を進めていたグラビア誌「こうべ」が注目されます。2月下旬発売の「こうべ」はB5判で本文130ページ。カラー写真47点、白黒写真92点を収録。和英両文の短いコメントをつけて、神戸を総合的に紹介した本になっています。定価は800円で5,000部発行。市内の書店29店ほかで発売されます。当店でも販売いたしますので、一度ご覧ください。

(N)



## 原稿募集

当「読書アテカルテ」では、読者の皆さんからの原稿を募集しています。テーマは自由ですが、本と読書に関するものを歓迎いたします。2000字以内にまとめて、当店・小林までお持ちいただくか、ご郵送ください。採用の原稿には薄謝を進呈いたします。

海文堂・3月のフェア/ご案内

## 世界の味 アロのための 和洋専門料理書フェア

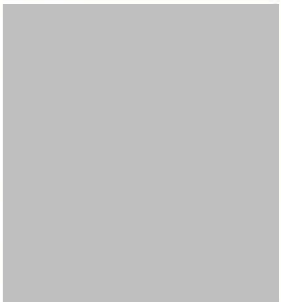


海文堂・今月の催し物は、「世界の味・アロのための和洋専門料理書フェア」です。

フランス料理、イタリア料理、スペイン料理等、数々の西洋料理をはじめ、四季おりおりの懐石料理等に代表される日本料理、又、中国料理など「世界の味」を、アロ調理士の皆様にお届けします。尚、併設いたしました、食べ物にまつわる読み物を集めております。是非ごらん下さい。

### 展示図書の一部

「フランス料理百科辞典」(全6巻)	三洋出版貿易	¥70000
「パスタ・ピッツァ」	三洋出版貿易	¥6500
「現代洋菓子全書」	三洋出版貿易	¥15000
「現代魚介料理全書」	三洋出版貿易	¥11000
「メニュー・コンパニオン」	三洋出版貿易	¥2000
「季刊・フランス料理」B.N. 全点	三洋出版貿易	各¥2000
「フランス料理スペシャル」	文化出版局	¥7500
「焼きもの」	柴田書店	¥3000
「むきもの全書」	柴田書店	¥4000
「包丁入門」	柴田書店	¥2800
「懐石伝書」(全7冊)	婦人画報社	¥45000



特別講座のお知らせ

神戸文学学校では、今年前半期の特別講座のプログラムを次のように決定して、参加者を待っています。参加は自由ですので、当学校までお気軽にお申し込み下さい。

回	月日曜	テーマ	講師
1	2.24(日)	ヒトラーと対したドイツ文学者—ルビトを中心に—	大阪外国語大学教授 八木 浩
2	3.15(土)	ピンクジェネレーションを中心に—イギリスの1930年代—	神戸大学助教授 風呂本武敏
3	4.5(土)	20世紀前半におけるイタリア文学の諸傾向	大阪外国語大学教授 荒谷次郎
4	4.19(土)	フランスのばあい—1930年代を中心に—	神戸大学助教授 山口俊章
5	5.10(土)	日本型エモーションナリズムの問題—久保 栄・金子光晴のばあい—	詩人 大江昭三
6	5.31(土)	日本文学の1930年代—その抵抗・転向・協力について—	神戸大学助教授 西垣 豊

- ★いずれも午後2時から4時半まで
- ★会場は神戸市民生協会館(三宮、神戸市役所ウラ、二筋目)
- ★来聴自由・会費は各回300円
- ★お問い合わせは、電話078-332-0900事務局へ



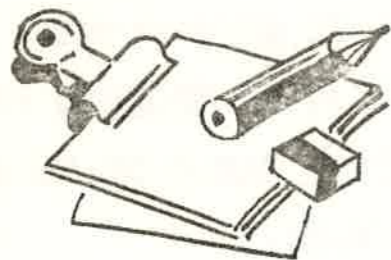
※ この全6回の特別講座を فراぬいて いるメイン・テーマは、個々のテーマからもわかることと思いますが、「ファシズムと文学者」です。現在の諸状況は、わずか50年の昔の1930年代をほうふつとさせる要素を含んで、流れ動いています。現在を自身の手でとらえ直すためにも、ご来聴いただきたいと思います。

尚、海文堂では、同学校の活動を今後とも読者の皆さんに"お知らせ"してまいります。

# 校正クイズ

またまた、前号のクイズに続いて、如藤康司さんの「赤文んぴつ四十年」から、クイズにちよ  
つと採掲。よく書き間違ふ漢字を並べてみました。左が誤りで、右が正解です。あなたはどれだけ  
できますか。正解を兎ずに、ためしてみてください。

誤	正	誤	正
絶対絶命	絶体絶命	枕草紙	枕草子
画竜点睛	画竜点晴	経理士	計理士
短刀直入	单刀直入	鐘乳洞	鍾乳洞
九転直下	急転直下	妻揚子	爪楊枝
危機一発	危機一髪	脈膊	脈搏
半身不随	半身不随	還境	環境
人事移動	人事異動	淡泊	淡泊
蜜月旅行	蜜月旅行	指命	指名
開礼口	改礼口	大低	大抵
漢法薬	漢方薬	遇然	偶然
騰写版	謄写版	祇園	祇園
宇頂点	有頂天	気嫌	機嫌



どうですか。全部できましたか。全部できた——それは立派ですね。誤字というのは、思いこみというのがなかなか捨てる難くて、正字をかくのは必ずかたじけな  
いものです。文字、ことばで人間は思考するのがあつうです  
から、正確な文字・幅広い概念で、文字というもの、  
ことばというものを、しっかりつかんでおきたいもの  
です。